

濁水かわら版

第101号 2020年6月9日

→ ボケ防止を兼ねて

アフンの森の優しい笑顔

ニコルさんと子供たち

C・W・ニコルさん死去 79歳。作家で環境保護活動に尽力。2か月前の4月4日夕、メディアが一斉に報じた。亡くなったのは同3日午前10時57分、直腸がんのため長野市の病院。葬儀は親族のみで行い後日、お別れの会を開く予定。喪主は妻真理子さん。簡潔な死亡記事に加え、若い時から環境保護活動に力を注いで1980年、長野県信濃町の荒地を購入、「アフンの森」を建設して住い95年、日本国籍取得などニコルさんの活動歴が記されていた。だが4日、新型コロナウイルスの感染者が、首都圏をはじめ大都市圏で急激に増え全国で4000人を突破。緊急事態宣言が7日発令され、ニコルさんの続報は消え去ったように思われた。何か物足りない感じは、大人の目線の訃報記事だけでなく、東日本大震災で大きな被害を受けた「福島の子供」をアフンの森へ招いていたことだ。昨年の最終回は10月12日襲来した台風19号で延期、さらにコロナ騒動で中止になった。そんな話をXさんとメール会話し「ニコルさんと子供の写真が有れば…」と話すと、ツイッターにたくさんあると紹介してくれた。無料・会員制の配布物であることからツイッターから借用した。

① 図Aは、ニコルさんがアフンの森で福島の子どもを迎えた写真だ。子どもが駆け寄り、手を差し伸べる優しい笑顔のニコルさん。図Bのニコルさんの著書「ボクが日本人になった理由」(2002年9月、ビオシティ刊)の表紙の品格ある微笑と比べると、田舎の好々爺が孫を迎えるような笑顔に感じる。

図Cはアフンの森の周辺図だ。19号台風で千曲川が決壊、北陸新幹線の車両基地が水没した映像を覚えておられよう。アフンの森は、その西北≒10km余、しなの鉄道(旧信越線)の黒姫駅に近い。俳人小林一茶の生家がある柏原や彼が江戸奉公へ出立する際、父と別れた牟礼の三本松が現在も残る。

② 図Bの「ボクが日本人になった理由」の表紙左に「今の日本(2002年)にはじめてやってきたら ボクは日本人になっただろうか?」とある。帯の「私は、日本人の美意識がなくなるとは思いません。[中]に入っただけです」は、この本でのドナルド・キーン(1922-2019年)さんとの対談要旨である。ご存知のようにキーン

さんは、08年文化勲章を受章した日本文学者。東日本大震災後の12年3月、日本国籍を取得した。→次頁へ



雑木林で子どもとの出会いに感動

③ 図Dは、雪景色のアファン^{アファン}の森。福島の子どものお別れ会のニコルさん。彼はキーンさんとの対談冒頭、日本の「子どもに感動した」と述べている。以下カッコ内は、本文中でニコルさんの言葉で補注した)

『僕は14歳から柔道を始めて、最初に日本に来た(22歳の時の)目的は空手でしたから、日本の自然のことは知りませんでした。…東京近郊の秋津にいたときに、雑木林があって、そこを散歩していると子どもたちが遊んでいるんですよ。「これ何という木？」と聞くと、8歳の子どもでも返事ができました。非常に印象的だったこともあります。真夏に雑木林中にすごい音が鳴っていました。ミーンミーンミーン。「これ何の音ですか？」と子どもたちに聞いたのです。「セミ」でした。



Cicada を初めて見る!!

僕はいつも小さな辞書を持っていたから調べてみるとCicada とありました。Cicadaという言葉はアメリカ文学にも出てきますから知っていましたが、実際にはどんなものなのか知りませんでした。カエルなのか鳥なのかもわからなかった。「セミって何？」って聞くと、子どもたちに「ホラホラ、あそこにいるじゃないか」っていわれるんですけど慣れていないからなかなか見えない。やっと見つけて、感動しましたね。子どもたちは何年間か地面の中にいて出てき



班ごとの記念撮影にも笑顔で帽子を振るニコルさん

政治家や官僚以上の子ども大使

④ ニコルさんは、10歳くらいのガキ大将がママシを叩いて殺し焚火^{たきび}で焼いて「こいつはうまいぜ!!」という話を載せ、「日本人ほど自然に親しんでいる文明人はいないと信じました」と、結んでいる。以上、ニコルさんがキーンさんとの対談冒頭で語った日本の子どもの印象だ。俗な言葉で言えば、日本を代表する政治家や官僚の語り以上に、自然保護活動に全力を注いでいたニコルさんの心を動かしたように思う。それが図Eの写真でも見られる、子どもたちを迎えた時の優しい笑顔であるように思われた。

ニコル、キーン両氏の戦争体験

⑤ 日本の子どもの話が終わると、対談は戦争体験へ移った。ドナルド・キーンさんは1922(大正11)年生まれ、ニコルさんは1940(昭和15)年生まれ。

口火を切ったのは18歳先輩のキーンさん。以下要旨で記す。『ニコルさんが生まれた年は、一生の中で一番悲しい年だった。ロンドンが毎晩ドイツ軍に爆撃されていた。新聞を見るのもいやな時、ニューヨークの真ん中タイムズ・スクエアの本屋へ行き、安い値段の「源氏物語」の英訳を購入した。それを読んで感激した。戦争がない。憎しみもない。人間は戦争のない社会を作れると救いになった。私は戦争前、コロンビア大学で日本思想史を教えていた角田柳作先生(1878-1964年)に教わった。先生は「あの国には帰りたくない」と、戦時中も日本へ帰らなかった。開戦当初、海軍が一流大学の成績上位10%の学生を集め「陸軍の2等兵になりたいか、海軍の将校になりたいなら日本語を勉強して下さい」と言われ海軍の将校となった。日本捕虜の多くは「殺して下さい」と言いました。→次頁へ

前頁より) 私は好きな本や音楽の話をして日本再建に努力してほしいと話しました。10人から15人が帰国しようと思うようになり、彼らとは今でも付き合いがあります』

ニ科尔さんの戦争体験

⑥『僕にも小さい時、戦争の思い出はあるけど敵はドイツです。母とロンドンのビクトリア駅にいた時、灰色の軍服を着た10人ほどの兵隊がいました。母が切符か何かを買いに離れた時、灰色の軍服を着た1人が僕を呼び、膝の上に乗せられてチョコレートを貰いました。母が驚いて僕を呼びドイツ人捕虜と判りました。電車の中では「ドイツ人が皆悪いのでなくナチが悪いと言ってました。子どもで Nazi という

言葉を知らず nasty(嫌な人)という言葉を知っていました。10歳くらいまではドイツ人と nasty が戦争をしていたと思っていました。ですからドイツ人に敵愾心^{てきがいしん}はありませんでした。しかし14歳くらいまでに日本軍が英国・オーストラリア・カナダの捕虜を残酷に扱っていたという話をたくさん聞き、恐ろしい国と感じていました。15歳の時、柔道を通してはじめて日本人に会ったのです。嘉納治五郎^{かのうじごろう}先生の弟子でした。大正時代に英国に渡り、日英同盟が崩れた時に悲しんだらしいけど日本に帰らなかった。その方は紳士で礼儀正しい。僕の頭は混乱しました。なぜ日本の文化があんな恐ろしい事が出来たのか。僕の日本との出会いは、その混乱から始まったのです』

ニ科尔さんと日本社会

⑦ 対談は続くが、ニ科尔さんの〈アフアの森の優しい笑顔〉の背景には、災害国日本の企業が深く関わっている。

図F 福島の子ども招待プロジェクトの主催者は、公益財団法人イオンワンパーセントクラブだ。それを福島県いわき市・南相馬市・広野町教委が後援。「公財イオン…」は、イオングループの主要企業が税引前利益の1%相当額を拠出、①次代を担う青少年の健全な育成。②諸外国との友好親善の促進。③地域社会の持続的発展 の3事業を柱としている。原発事故を受けた福島県の子ども支援は2016年スタート。小学3～6年を対象に初夏・夏・秋・冬に年9回実施。延べ800人以上の子どもが参加したという。19年度は小学4～6年とし、中学生(リーダー養成)コースを設けた。16人を募集したところ7倍近い110人の応募があった。中に「いじめを受け苦しい時、アフアの森プロジェクトに参加して自信が付き生きるのが楽しくなった」生徒がいたという。5回目の最終回は台風19号の影響で延期、コロナ騒動で中止になった。ニ科尔さんは、その1～3回に子どもたちを迎えたが、4回目は入院で参加できなかった。

⑧ ニ科尔さんが関係した事業に「イオンエコワングランプリ」(公財イオン…主催、毎日新聞共催、内閣府・文科省・環境省後援)がある。目的は高校生の環境活動を推進するもので昨年まで8回実施。ニ科尔さんは第1回から委員を努めた。16年6月6日、天皇皇后両陛下(上皇両陛下)が訪問。案内したニ科尔さんは感激したようだ。



子どもらが帰るバスを見送るニ科尔さん

⑨ 今回は「ニ科尔さんと子ども」をテーマにした。ニ科尔さんは2歳の時、日本の地を踏み、最初に接したのが子どもだったことを2頁③で紹介した。その感激が薄れ、対談相手のキーンさんに2002年の日本なら、去っただろうと示唆している。バブル崩壊後の失われた10年が過ぎ、私も日本が年々変わったきたことを強く感じている。今後も日本を見つめたい。(次回はコロナ)